

ABIC 国際社会貢献センター

Information Letter

No. 69 2024年4月

外国企業支援	第16回川崎国際環境技術展に参加して	2
自治体・中小企業支援	化学系ベンチャー企業で共に働く	3
	地域企業の支援業務にやりがいを感じている日々	4
教 育	「多様性と地域のつながりのアフリカ」の紹介	5
	ABICとのご縁 —東洋大学で、そして青山学院大学で—	6
留学生支援	留学生支援バザー	7
その他	カンボジアで思うこと	8
	日本語講師とJETRO	9
	2023年度より中小企業支援、中高・大学院にての講師等を経験	10
	地震発生時の「避難所における外国人被災者支援研修」に参加して	11
事務局だより	関西地区会員懇親会を開催	7
	会員の種類	12
	法人・個人正会員／賛助会員一覧、活動会員数	12
	賛助会員入会のお願い	12

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)
Action for a Better International Community

www.abic.or.jp

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-2-1
霞が関コモンゲート西館20階
Tel : 03-6268-8604 Fax : 03-6268-8652
e-mail : mail@abic.or.jp

(関西デスク) 〒541-0053 大阪市中央区本町4-4-24
住友生命本町第2ビル9階
Tel : 06-6226-7955
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

外国企業支援

第16回川崎国際環境技術展に参加して

いわさき たけし
岩崎 剛士 (元 Primetals Technologies)

UNIDO東京投資・技術移転促進事務所（UNIDO東京事務所）は、国際連合工業開発機関と日本政府との協定に基づき、主に開発途上国・新興国の経済発展を支援するために設置された機関である。このたびUNIDO東京事務所は、2023年11月15日、16日の2日間にわたり、川崎市が主催して行われた第16回環境技術展に、産学官連携の支援機関として参加した。同展示会は、「技術と英知の融合が切り開くグリーントランスフォーメーション」をメインテーマとし、脱炭素社会の実現に向け、最先端の環境技術・サービスを展示するとともに、新規事業開拓・販路開拓マッチングを企画したもの。

UNIDO東京事務所は独自にブース展示を行うのと併せてベトナムとバングラデシュから招聘した環境技術の専門官による講演を行い、さらに専門官と日本企業との新規事業開拓・販路開拓マッチング会を実施した。ABICからはそのマッチング会の通訳者としての活動依頼があり、山根学会員と私の2人が参加した。

今回来日された専門官は、バングラデシュからMr. Md Shahadat Hossain（バングラデシュ環境森林気候変動省上級次官補）、ベトナムからMr. Nguyen Truong Phi（ベトナム科学省技術革新局室長）で、前者には山根会員、後者には私に対応した。

面談は、午前中（10:00～12:00）を4コマ、午後（13:30～16:30）を6コマの1コマ25分ずつに分け、個別面談を希望する企業1社に1コマずつ割り当て、バングラデシュの専門官ブースと、ベトナムの専門官ブースにそれぞれ分かれて行った。両ブース共に、ほぼ全てのコマが事前の面談予約でふさがり、日本企業のバングラデシュとベトナムに対する関心の高さがうかがわれた。

打ち合わせは、まず日本企業側から自社の環境技術をPRし、その後、その技術がそれぞれの国の、どのような分野での適用が考えられるかを議論する形で行われた。一口に環境技術といっても、内容的には多岐にわたり、気体や液体をナノ化する技術、農業副産物を2次産業の高機能材料に変換するバイオ技術、再生エネルギー水素蓄電システム技術、ゴミ減容技術、特殊フィルター活用の排水浄化処理技術など、独自で先端的な技術ばかりで、日本企業の

技術力の高さに驚かされた。さらに、これらの企業の方々は非常に熱心で、自社の技術を熱く語られるその姿勢には、思わずこちらも現実の商談で顧客と話しているような錯覚に陥るほどであった。私は、鉄鋼プラント関係の業務に携わり、日本技術を外国顧客へ説明するお手伝いをしてきた期間が長かったことが幸いし、今回日本企業の方々が使われた技術用語も比較的なじみのあるものが多かった。ただ、私の英語力の限界で、それらの技術の内容や、日本企業の方々の熱い思いが、専門官にうまく伝わったか、いささか不安が残っている。

今回来日された専門官の方々は、おのおのの国の環境技術を主導する立場におられる。ご帰国後は、この環境技術展で得られた知見を、それぞれの国内で有効に拡散いただき、それが両国の環境改善、ひいては地球全体の環境改善につながることを希望している。

今回このような地球的課題の克服をテーマとしたマッチング会に関わる機会を頂いたことに対してABICの関係者に感謝するとともに、UNIDO東京事務所の関係者ならびにバングラデシュ、ベトナムの皆さまのますますのご活躍を祈念する。



マッチング会の様子（左から2人目が筆者）

自治体・中小企業支援

化学系ベンチャー企業で共に働く

たご ひろし
田子 弘 (元 三菱ケミカル)

はじめに

2017年に私は40余年務めた総合化学会社をリタイアした。入社時にこの職を選んだのも「事業を通じて、異文化交流をしたい」が理由であったので、在職中は国内での仕事をしつつ機会があれば海外での仕事も積極的に担当し、反省することもあるが、全般的には満足な会社生活であったと思っている。

リタイア後も自分の知見や経験を生かして海外と関係する活動の機会を持ちたいと、2017年11月にABICのメンバーに加えていただいた。その後具体的な機会を求めて、大学講座講師の勉強会や企業からの講師派遣要請への応募なども何回か試みたが、実際の活動には至っていなかった。

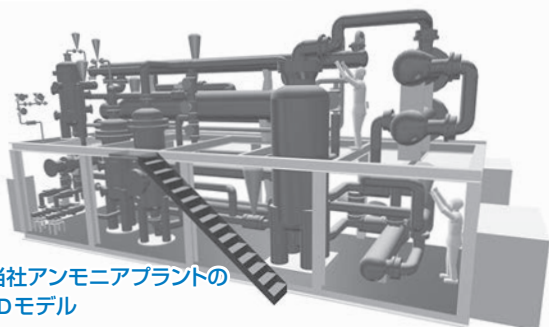
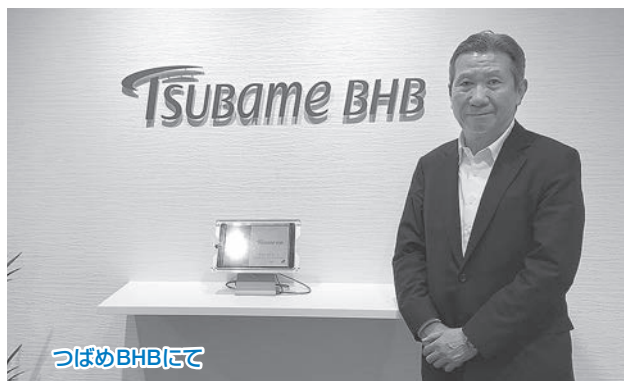
2021年3月にABICから「横浜の企業から社外取締役の紹介要請がある」とのご連絡を頂き、会社の内容を見ると「新しいプロセスで画期的なプラントを世界に売り出そうとしている」化学ベンチャー企業であり、キーワードは「触媒・化学プロセス開発」「プラント建設・操業」「世界展開」と私が現役時代に励んでいたこととマッチしていた。早速応募し、何回かの面接を経て、まずは顧問として、その後に社外取締役として仕事をさせていただくことになり、現在に至っている。

会社紹介 <https://tsubame-bhb.co.jp>

つばめBHB株式会社は2017年4月に発足し、新たに発明した触媒によりアンモニアを既存技術より低温度・低圧力・小規模で製造する技術を持っている。これにより小規模オンサイト型のプラントを世界中の必要な所に供給して環境・食糧問題を解決し、持続可能な社会の実現に寄与することをVisionとしている。

現状

前述のような技術とVisionを持った当社への世間の注目度と期待は極めて大きく、世界各地の環境・食糧問題などのフォーラムからしばしば招請を受けており、多くの会社との事業協力も進めている。また商業用プラントの引き合いも多数頂いており、その中で何件かは成約している。

当社アンモニアプラントの
3Dモデル

現在多くの引き合いへの対応と、成約した案件の順調な完成、さらには一層の技術のレベルアップ等のために、全社員が一丸となって頑張っている。そのため仕事量は月ごとに増えて、常に人手不足の状況にあり、毎月のように新メンバーが加わり、2017年の社発足時に2人であった社員が2020年には約30人、現在では70人超と急成長している。

メンバーは、当社のVision・Mission・Valueに共鳴し、それまでの職場では得られなかった働きがい求めてきており、それぞれ専門の能力が高い人が多く、彼ら彼女らの熱意とバイタリティーには頭が下がる思いがする。

しかし、この集団にも課題はあり、それは主に次の2点だと見ている。

1点目は新しいことに取り組む中での成功または失敗の経験が少ないこと。これは日本の化学企業に共通する課題であり、1980年代以降、新技術・新プロセス・新事業の立ち上げを経験する機会が残念ながら少ないことが影響している。

2点目は各人がさまざまな企業の出身や大学の研究室の出身で互いに文化の相違があり、技術面の細かな点について見解の不一致が生じ得ることである。

このような課題にも私の出番があると考えており、本来業務の執行サイドの監督に加えて、日常業務に関しても機会に応じて自分の成功・失敗体験からのアドバイスを心掛けていく。

今後

今後の課題は成約の積み上げ、成約案件の順調な完成と稼働、そしてさらなる技術力向上である。成約案件が順調に稼働し、さらに多くの成約につながり、その結果として、多くの「つばめ」のプラントが文字通り世界に羽ばたくことを楽しみにしている。

ABICのおかげで、この素晴らしい機会を得られたことにこの場を借りて改めて心からお礼を申し上げる。

自治体・中小企業支援

地域企業の支援業務にやりがいを感じている日々

すぎむら かずと
杉邨 一人 (元 三洋電機)

2022年10月初めごろ、ABICコーディネーターの方からメールを頂いた。その内容は「愛媛県下企業へのプロフェッショナル人材の紹介の話があるので応募しないか」とのお誘いであったが、当時の私は映像機器技術者として電機メーカーで積み重ねたキャリアを生かせる仕事を離れ、新たな仕事をスタートしたばかりの状況であり、かつ当該企業の所在が大阪から離れていたこともあり、いったんはお断りした。しかしながら、魅力ある仕事内容に心中は揺れていたことは確かで、そんな中、1週間が経過した頃、再度のメールが届き、確か電話でも「この案件はあなたしかいない」「ベストマッチングに間違いない」との非常に熱心な、そして誠意あるお話を頂き、Webによる面談・面接、その後、11月には2泊3日の旅程で会社を訪問し、対面での面談・面接の機会を頂いた。

私自身、この時の面談・面接を通じて、私の経験や知見を生かしてもらえるこの機会を逃してはならないとの思いを強くしたことを記憶している。またこの間、ABICコーディネーターの方には、いろいろと相談することができ、多々アドバイスをもらったことは心強く、今もなお感謝している。

このような経過で2022年12月から正式に採用していただき、業務形態は、双方の事情や状況を考慮し、通常はリモートで、これに加えて月1回の訪問での支援業務となった。そして最初の訪問となる12月訪問では、これから一緒に業務を行うチームの方々の要望を受け、商品の基本技術、採用しているデバイス技術などを分かり易く説明することを第1回目のテーマとし、パワーポイントのスライドを作成した上で行ったところ、社長、経営職の方々を含め、ほぼ全員が直接またはWebを通じて参加され、かつ積極的に質問や意見があったことから、新しい知見や知識を得ようとする意識が高い会社であることが見てとれた。これは私にとって、新鮮な驚きであり、やりがいを感じると同時に身が引き締まる思いであった。

その後の毎月の訪問に際しては、日頃のリモートによる活動のフォローアップとともに、製品の品質に関することを中心に関連技術を加えたテーマを選定し、資料や情報を整理し、当日には資料（パワーポイントスライドを基本に）を示しながら解説・説明し、都度質疑応答を行う形で進め



訪問時、資料を使いながら説明する様子

た。また、会社内で採用しているコミュニケーションツールを使用できる環境や取引先とのWeb会議にリモートで出席できる環境を整えてもらい、会社やチームの置かれている状況を理解できるようになったことは、テーマの選定や資料作成に役立ったことは言うまでもない。さらに新製品の開発案件も開始され、チームの皆さんと共に進捗させていくことは、私自身のキャリアを最大限に生かせる機会となっている。

訪問を月1回としたことで、和やかな中に新鮮さと少しの緊張感を持ってチームの方々と接することができ、チームの方々も集中して取り組む機会となり、少しずつスキルアップされていることを実感できる。同時に私自身もやりがいを感じられる活動となっている。これは余談となるが、訪問時の宿泊先には温泉施設があり、毎月の私の楽しみの一つとなっている。改めて今回の機会を与えていただいたABICに心より感謝している。

今回紹介していただいた株式会社サカワは、最近企業理念を新しくされた。創業100年を超えた老舗として、創業時からのアイデンティティーをきちんと持ちつつ、新しいことに挑戦する気概を示されており、現状を打破する新商品などを検討されている様子を見ると、うらやましくもある。私自身、継続して適切なアドバイスを提供し、貢献できるところがあれば良いのだが、と考えを巡らす今日のごろである。

教育

「多様性と地域のつながりのアフリカ」の紹介

やまうら のぶゆき
山浦 信幸 (元 国際協力機構)

私は知人の紹介でABICの日本語教師養成講座を受講し、東京お台場の国際交流館で日本語講師として活動しているご縁から、この活動の他に、前職でアフリカ3ヵ国に駐在したこともあり、新座市の公民館で実施しているシリーズ講座「世界の文化を学ぶ」の中でアフリカを紹介する機会を頂き、2023年9月に実施した。

私のアフリカ滞在は延べ9年になったが、もちろんアフリカの専門家ではない。加えてこのシリーズ講座でこれまで取り上げられたのは、ブラジル、イラン、サウジアラビアそしてインドといずれも個々の国々であったが、今回はアフリカ全体の紹介であった。実を言えば、この講座へ果たして参加者がいるのかと少し心配であった。というのも日本から見るとアフリカは遠く、アフリカの情報といえば内戦、クーデターや自然災害など一過性でネガティブなものが大部分であり、恒常的な関心と呼ぶものが乏しいからである。しかし参加者に事前に聞いたところ、皆さん外国に関心があり、このシリーズ講座に続けて参加されている方が何人もおられ、中でも2人の方はアフリカ（ガーナ、エジプト）に行ったことがあるとのことであった。

話の組み立てとしては、まず滞在した3ヵ国を紹介。3ヵ国がアフリカ北部のモロッコ、サハラ砂漠の南縁のニジェール、赤道直下のガボンと、それぞれ特徴的な条件下にあるので、アフリカ全体を理解する上で役に立ついくつかの切り口を基に話を進めた。

(1) モロッコ

ジブラルタル海峡（最短で15km）を挟んでスペインと向かい合っているので貿易、人的交流（出稼ぎ、観光）が発達。雨にも恵まれ農業も盛ん。

(2) ニジェール

サハラ砂漠の南の縁に位置するので降水量が少なく、農業は主に限られた作物（トウジンビエ、玉ネギなど）しか栽培できない。内陸国で天然資源も限られているので世

界最貧国の一つである。しかし、昔からセネガルからスーダンに至る砂漠の南縁およびサハラ砂漠を越えてモロッコやリビアに至る交易路が存在している。またギニア湾沿いの各国とは出稼ぎや貿易でつながり、加えて地域共通通貨が確立しているので閉塞感はありません。

(3) ガボン

熱帯雨林が国土の大部分を覆う人口200万人ほどの国で、原油を算出することから所得が格段に高い。ただ、石油収入を活用した開発事業は地理的条件やいわゆる「資源の呪い」のかせもあり必ずしも順調ではない。かつては南アフリカの反アパルトヘイト支援を行い、また地域内の紛争の調停役を務めるなど、地域の中で一定の地位を占めている。

以上3ヵ国の特徴を踏まえ、アフリカを理解するため以下の切り口でお話しさせていただいた。

多様性として、

- ①地理的条件（欧州など市場へのアクセス、沿岸国と内陸国）
- ②気候条件（多雨国と少雨国）
- ③天然資源の有無

地域のつながりとして、

- ①北部（対欧州、地中海沿岸国、アラブ諸国）
- ②中西部
- ③南部（南アフリカを中心とした流通網）・東部（対アラブ諸国、環インド洋諸国）

終了後のアンケートを見ると、おおむね関心を持って聞いていただけたようであった。私の話が、参加者の皆さまのアフリカへの関心をより広げられたら幸いである。また、この機会を与えていただいたABICの関係各位に改めて感謝する次第である。



前半はイスラムらしいモロッコの民族衣装ジュラバで



後半は赤道直下のガボンの各民族のデザインを使ったシャツで

教育

ABICとのご縁 —東洋大学で、そして青山学院大学で—

さとう せつや
佐藤 節也 (元 日本銀行)

私のABICとのご縁は、東洋大学広報部のアレンジにより齊藤秀久日本貿易会常務理事・ABIC理事長（当時）とグローバル人材育成を巡って対談した2016年にさかのぼる。背景を申し上げると、2014年、東洋大学は文部科学省からスーパーグローバル大学の一つに選定された。その際の目玉の一つは、大学グローバル化のけん引役として国際学部グローバル・イノベーション学科を新設することであった。当時私は新学科開設準備の中核として学科のデザイン全般に関与していた。新学科を定員100人、うち日本人学生70人、外国人留学生30人の構成とし、外国人留学生には手厚く奨学金を付与して優秀な学生を招致する傍ら、日本人学生には全員1年間の海外留学を義務付けてグローバル感覚を磨かせ、講義は全て英語で行うとの大枠までは決まったものの、具体的な講義科目の企画と講師選定では苦労が絶えなかった。特に私は学者育ちでなく実務家教員であるため、学生には理論ばかりでなく実務的な科目も学んでほしいとの思いが強かったが、それをどう科目設計に落とし込むかで難航していた。それを救ってくれたのが、齊藤理事長との対談だった。

齊藤理事長とはグローバル人材育成のために東洋大学と産業界とでコラボしようということで意気投合し、ABICの大学講師派遣プログラムを紹介された。水泳の萩野公介選手のオリンピックでの活躍や、陸上の桐生祥秀選手の100メートル9秒台達成、箱根駅伝での快挙等による大学知名度アップが追い風となったのか、ABIC講師陣の方々にはご快諾いただき、2017年4月、新学科発足とともにABIC 講座「International Business Today」が誕生した。ABICからは鶴見邦夫氏（総合商社）、百田功氏（インターネット・ビジネス）、名達博吉氏（自動車産業）、河崎隆夫氏（企業経営・異文化交流）のベテラン講師陣にオムニバスの登板願ひ、私が初回と最終回に講義を担当した。本ABIC講座は、ABICコーディネーター（当時）の坂野正典氏、猪狩眞弓氏を窓口に、私が2022年3月に東洋大学を退官するまで6年間続いた。この間、私は講座の全ての講義に出席したが、他の大学では見られないことのように。コロナ禍はあったものの、受講生数は平均30-40人前後で安定的に推移し、ある年などは100人を超えて人気の高さを裏付けた。100人分のレポートを採点する講師の方々の熱



青山学院大学での講義風景

意には今でも頭が下がる。また、フィールドワークの一環として鶴見氏にアレンジをお願いしてご出身元の住友商事本社を訪問し、日本のリーディング・カンパニーのオフィス環境や雰囲気を実感できたのも学生にとっては良い経験となったようだ。

東洋大学退官後、2023年4月にコロナ収束祝いでABIC講座「International Business Today」同窓ランチ会を開いていただき思い出に花を咲かせた。その後、現在はABICのコーディネーターを務めておられる鶴見氏からメールを頂戴し、青山学院大学のABIC国際ビジネス講座で3コマ教えないかとお話を頂いた。東洋大学でABICとコラボさせていただいた講座と似た仕立てなので、二つ返事で講師陣に加わることにし、1月に3回目の講義を終えた。受講生数25人ほどのちょうど良いサイズのクラスで、受講態度は大変良い。「講義を遮って質問して構わない」と言っても学生は質問を遠慮しているように見えたが、指名するとしっかりと発言するので頼もしく思った。2024年の箱根駅伝での青山学院大学の快走も小気味よかった。他の大学の見知らぬキャンパスで見知らぬ学生相手に講師を務めるのはとても楽しい。未来を背負う若者とどうい一期一会が待っているのか、とてもワクワクする。2024年度も講師継続が決まったが、それ以降も機会があれば是非続けたいと願っている。

留学生支援

留学生支援バザー

留学生支援グループコーディネーター

たけはら まさかず
竹原 正和 (元 伊藤忠商事)

関西デスクコーディネーター

かしむら かおる
鹿志村 馨 (元 住金物産)

東京国際交流館

2023年11月11-12日の両日、恒例の秋の新入館生歓迎バザーが東京国際交流館で開催された。売り上げは約11万円となり、主催者であるRA^(※)に活動資金として提供させていただいた。これは100箱もの品物をご寄贈いただいたABIC会員や日本貿易会会員各社のご協力の賜物であり、厚くお礼申し上げます。

両日とも強風、寒さ、小雨の悪天候（しかも2日目は館内点検作業のため全館停電）の中での開催となったが、そんな中で、RAたちの企画力が目立った。例えば、バザー会場でのポップコーンサービスは口コミで広がり学生（とその家族）を呼び込んだし、館内放送によるタイムリーな呼び掛けは悪天候下で効果を発揮した。

両日とも日本語広場の講師（計5人）にご協力いただき、来場した学生に日本語広場、日本文化教室のチラシを配布しながら積極的に勧誘いただいた。

兵庫国際交流会館

2023年11月12日、恒例の秋の新入館生歓迎バザーが兵庫国際交流会館で開催された。既入館者を合わせて約60人が来場した。今回もABIC会員や日本貿易会会員各社から58箱の広範囲な品物をご寄贈いただき、売り上げは約3万円となった。この売上金は、主催者である同館のRAに提供させていただいた。ご支援いただいた皆さまに厚く感謝申し上げたい。

生活必需品は廉価で販売され、来日間もない学生には非常に好評だった。特にアフリカから来日した学生は冬の衣類を多く買い求めていた。友人の依頼で何度も会場を訪れる学生が目についた。

(※) RA (Resident Assistant)：交流館に居住し、同館に入居する外国人留学生などの日常生活や勉強上のサポートなどを行う日本人大学院生。



東京国際交流館



兵庫国際交流会館

事務局だより

関西地区会員懇親会を開催

2024年2月21日（水）、ホテルグランヴィア大阪「孔雀の間」において関西地区会員懇親会を4年ぶりに開催し、活動会員約50人にご参加いただきました。宮本理事長によるあいさつ・乾杯発声の後、会員の皆さまに交流・懇親を深めていただき、盛会のうちに終了しました。



宮本理事長あいさつ



参加者全員で

その他

カンボジアで思うこと

かきした よしお
垣下 義雄 (元 日本電気)

私は、35年以上にわたり勤務したメーカーで入社以来海外事業に携わり、合計5カ国15年以上の海外駐在を経験した。得難い経験になったと思っている。定年の足音を聞くにつれ、なんとかこの経験を内外を問わず次世代に伝えられないかとの思いを強くしていた。そんな中、元上司から紹介を受けABICに登録した次第である。ある日、ABICからの紹介の中に、偶然、公益財団法人結核予防会カンボジア健診センター責任者の公募案内を見つけた。募集要項によると、英語堪能、海外における経営管理経験、また、医療業界での勤務経験という条件があり、自分の経験に合致すると思い早速応募した。幸いにも採用いただくこととなり、2022年8月に首都プノンペンに赴任した。

結核予防会は日本で戦前から結核予防を進め、その知見を基に海外でも活動を行ってきた財団である。カンボジアでも長くJICAなどと協力し結核予防活動を行ってきた。内乱の混乱期を経て社会が落ち着きを取り戻すにつれ、カンボジアでも生活様式が変化し、今後生活習慣病が増えることが予想された。このため、同財団はカンボジアの人々の健康増進には予防医学に重点を置く健康診断の普及が不可欠と考え、2019年に、プノンペンで良質な健康診断の提供を目的とする結核予防会カンボジア健診センターをオープンした。

赴任してみるとプノンペンは予想に反して近代的な都市が広がっており、ポルポト時代のイメージが残っていたせいか、これはやや予想外であった。実際にセンターに着任し活動を始めると、ふむふむと思うことばかりであった。カンボジアは仏教に根ざした国であり、年長者には敬意を

持って接してくれる（年寄りの役得）。人々は素直で従順、控えめでおとなしいとの印象である。間違いなく好印象であったし、これはカンボジアの人々の美徳である。

だが、裏を返しうがった見方をすれば、やや積極性に欠け、従順であるが故に主体性に少し欠けるように感じた次第。そこで改めて考えたのは、カンボジア人職員の美点をさらに伸ばし、センターを運営していきたいということであった。具体的に言えば、健診センター独自のミッションを掲げ、そこに向かって全員で一体感を持って取り組みたいということである。そこで、職員全員参加で、自分たちがやりたい姿を議論してもらい、健診センターのミッションを策定した。また、一体感を高める試みとして、自分自身の情報発信に努め、職員間のコミュニケーション向上を図ることはもとより、極めてべたな取り組みだが、朝礼、職員誕生日、社員旅行などを始めた。誕生日については、職員の誕生日をひそかに調べた。とはいっても、内戦時代の名残か出生届け自体があやふやなため、人事上の書類と実際の誕生日が違うなどという驚くべき事実遭遇したりした。ただ、最初にサプライズでバースデーケーキでお祝いをした時の職員の驚きの笑顔は忘れられない思い出になるであろう。策定したビジョンは「日本標準の品質と信頼ある健診サービスを通じ、保健医療教育と早期診断により人々の健康を増進する。カンボジアで最初に思い起こされる健康診断センターを目指す」である。拙いかもしれないが、職員の思いが詰まったビジョンであると思っている。このビジョンの実現に向け、職員と共に一丸となって取り組みたいと考えており、これは冒頭申し上げた私の経験をこの地に残す道であると信じている。



スタッフに誕生日を祝ってもらう

カンボジア健診センターのスタッフ一同
(後列右から3人目が筆者)

その他

日本語講師とJETRO

ひろ せ けい い ち
広瀬 恵一 (元 伊藤忠商事)

2023年10月、ABICコーディネーター（CN）の竹原氏より、勤務先であった伊藤忠商事の現地社員向け日本語講座を担当しないかとの打診を頂いた。ABICの日本語教師養成講座第25期を受講してから4年、コロナ禍もあり「日本語教育」からは遠ざかっていたので迷ったが、最終的に引き受けすることにした。養成講座で諸先生から厳しく指導された授業の事前準備の要領を思い出しながら翌日の授業原稿を作成して、何とか4回の授業を無事終えることができた。養成講座では「日本語で日本語を教える」というのが基本であったが、今回は英語で授業を行ったのでスムーズに進行することができた。1回1時間、計4回の授業であり、その学習範囲は限定されるが、竹原CNが作成した教本に沿って「あいいうえお」の発音から始め、最終的に簡単な自己紹介ができることを目標とした。参加者はエクアドル・キト、インドネシア・ジャカルタ、UAE・ドバイの各支店に勤務する現地採用社員で、授業は東京本社の会議室でZoomを使って毎週木曜日の午後3時からスタートした。ジャカルタとドバイは勤務時間中だがキトは午前1時、受講者の熱心さに感心した。短期集中型の授業であったが、今回の授業が将来本格的に日本語を学習してみようと思う切っ掛けになればと、文型・その応用については教本とは別に「文字カード」を作成するなど、「分かりやすい」授業を心掛けた。養成講座で学習した教本『みんなの日本語』にある文法はわれわれが習った学校文法とは異なるが、日本語学習者にとって理解しやすく、また教える側にとっては英語を使うことで文型等の解説がスムーズに学習者に伝わることを今回の授業で実感した。最後になるが、一つうれしいことがあった。2024年1月に伊藤忠商事本社で現地社員研修が行われ、その最終日の打ち上げパーティーに竹原CNと私が呼ばれた。今回の講座を受講した10人もそのパーティーに参加しており、私が担当した3人とその席で会うことができた。彼らのうち今後本格的に日本語を学ぼうとする人が出てくることを期待したい。

実は、ABICから声を掛けていただいたことがもう一つある。それは2011年にさかのぼるが、ABICより日本貿易振興機構（JETRO）の貿易投資アドバイザー募集の話を頂き応募、その後7年間その職を務めた。さらにアドバイザーを退いた後も、貿易実務・英文契約が専門のエキスパート職を1年、支援先企業の輸出業務をサポートするパートナー職を1年、結局9年間JETRO関連の仕事に携わるこ

になった。アドバイザーの仕事は、貿易および海外投資に関するもろもろの質問について電話・面談によりアドバイスを行うことで、大手企業からの専門的な問い合わせもあるが、多くは中小企業や個人事業者からの相談である。その中には貿易は初めてという相談者もいて、インコタームズや通関手続きなど、その相談内容はさまざまであった。私の担当地域は日本と欧州で、主に輸出入規制、税制、貿易実務、物流を担当した。商社時代に大まかな関連知識は持っていたつもりだったが、相談者からの具体的な質問・相談に対応するため、多少大げさではあるが日々資料と格闘し、新たな知識を積み重ねていく毎日であったように思う。幸いJETROにはアップデートされた多くの貿易関連資料・書籍があり、さらには貿易実務の著書を出している職員も身近にいて、その方から助言を頂いたりして大いに勉強になった。もちろん相談対応では海外での経験を踏まえた実践的なアドバイスも求められる。それにはなるべく自身の自慢話にならぬよう細心の注意を払って話をしたつもりである。9年間相談者のサポートを行う裏方の仕事であったが、時には感謝のメールを頂くこともあり、充実した時間を過ごすことができたと思っている。



社員研修のパーティーで受講者と共に

その他

2023年度より中小企業支援、 中高・大学院にての講師等を経験

あら き やすふみ
荒木 康文 (元 伊藤忠商事)

私は2021年5月末にABICの活動会員として登録し社会貢献の機会を望んだが、残念ながらコロナ禍の真ただ中でABICからの案件紹介も減少し、活動の機会をつかめずにほぼ2年間を過ごした。

コロナ禍が終息に向かった2023年には4案件を頂戴し、そのうちの1案件は今も継続して遂行中である。それは2023年6月から東大阪市産業創造勤労者支援機構 モノづくりワンストップ相談窓口 企業支援コーディネーターとしての業務である。企業支援コーディネーターは東大阪市内企業の国内販路開拓支援および新規事業に対するマーケティング・ニーズ調査支援を主たる業務とする。半年強で既に60社以上の相談を受けた。同支援機構のモノづくりワンストップ相談窓口には、企業支援コーディネーター以外に、技術コーディネーター、(海外) 販路開拓コーディネーター、東大阪ブランドコーディネーターが在席する。

私自身2016年前半より中小企業に勤務していることもあり、このような社会貢献としての中小企業支援コーディネーター業務は私の興味の中心に据えられており、コロナ禍で遮断された折衝対応が復活した今日、大いに有意義な活動ができていると考える。その意味でもABICからのご紹介に感謝する次第である。

次に、2023年2月と3月に和歌山県立向陽中学校と同高等学校で講師を務めた。同中学校は3年生70人を対象に、また高等学校は1年生280人を対象に、「ロシアとウクライナについて」のタイトルでお話しし、皆さんに真剣に聞いていただいた。中学生の部は、できるだけ易しく、ロシアの「いろは」的な映像・画像をふんだんに利用しお話しした。



和歌山県立向陽高等学校での講義風景
(スクリーン下に立つのが筆者)

高校生の部ではロシア・ウクライナの戦争が2国間だけの話ではなく米国の関与も関連している点を分かりやすく取り入れてお話しした。

この案件を頂いた際は、Z世代の方々にどういう風にお話しすれば良いか悩み考えたが、結果的に映像・画像をふんだんに利用したことが話を分かってもらえることにつながり、安堵感を覚えた。私の印象では皆さん学習意欲が高く、後から授業感想文を見て内容把握が的確だったのに感じた次第である。

さらに、2023年5月にUNIDO東京投資・技術移転促進事務所主催の「Bangladesh・セミナー & 商談会」にて日本企業とBangladesh企業との商談会の通訳を含むマッチングアシスタントを務めた。Bangladeshから20社弱の企業が参加、私は大阪の環境バランス理論技術を保有する会社と食品環境技術を保有する会社のマッチングを担当し、特に環境バランス理論技術の会社には「ぜひ英語によるまとまった説明資料を作成されるべき」とのアドバイスも行った。

大阪の企業が欲するニーズにぴったりマッチする相手企業が参加していなかったのが難しかったが、ABIC会員として初のマッチング業務に携わり良い経験になったと考えている。

最後に、2023年12月に京都外国語大学大学院 秋期講座「国際ビジネス研究II」にて「ロシアの現状と世界に与える影響」のタイトルで講師を務めた。受講生は、言語文化コース ヨーロッパ・ラテンアメリカ地域専攻の2人、同 東アジア地域専攻の中国人留学生2人、同 観光文化研究の1人、実践言語教育コース 日本語教育の1人の計6人であった。

前述の和歌山県立向陽高等学校での講義内容をさらに深掘りした形で、ロシア・ウクライナ2国間関係だけでは語れない国際関係の枠組みの中での2国間関係についてお話しした。シカゴ大学国際政治教授のビデオトークを取り入れたほか、ロシアの国民性をロシアの国際政治教授のコメントも取り入れて解説した。6人の受講生の皆さんに真剣に聴き入ってもらったことは貴重な体験であった。

以上、2023年の活動を振り返り、改めてプレゼンテーション・説明の仕方について自分なりの学びもあり、受講生の理解に感謝の意を表したい。

東大阪市産業創造勤労者支援機構の企業支援コーディネーターとして引き続き活動しながら、今後さらなる講義活動も活発に行っていきたいと考えている次第である。

その他

地震発生時の「避難所における 外国人被災者支援研修」に参加して

小中高校国際理解教育グループコーディネーター **坂本 英樹** (元 日商岩井)

2024年は能登半島地震という大災害で幕を明けた。日本では近年でも東日本大震災、熊本地震など大きな地震に見舞われ、これから東海地震などが起こると予見されている。各地の自治体や国際交流協会などでは、地震、台風、大雨などの災害時に外国人を支援するボランティアを対象に、研修会や実地訓練などを年数回開催している。台風、大雨などは天気予報で事前把握が可能なため、研修会はいつ発生するか分からない地震をテーマに行われることが多い。

東京都が設立した公益財団法人東京都つながり創生財団は、2023年12月8日、東京都内の区市町村や国際交流協会の職員、災害時に外国人支援を行うボランティア約45人を対象に、地震発生時の「避難所における外国人被災者支援研修」を開催した。都内には、2023年7月現在、61万人以上の在住外国人が生活しており、首都直下型地震が発生した場合の外国人支援は喫緊の課題となっている。そのような災害時には、区市町村、国際交流協会および地域のボランティアの活動が重要になってくる。今回の研修の目的は、避難所での外国人支援についてロールプレーを通して考えることであった。

ABICは日ごろから東京在住外国人とつながりが多いということで、東京都つながり創生財団から本研修のロールプレーを行う外国人被災者役の手配を依頼された。そこで、留学生支援グループのコーディネーターの協力を得て、東京国際交流館で日本語を勉強している留学生に声を掛けるところ、10人の応募があった。10人の出身は、台湾、ベトナム、中国、ミャンマー、ケニア、フランス、米国、ブラジルと多岐にわたり、複数の言語が必要な状況をつくることができた。

留学生たちが演じるのは、地震で家が壊れたため避難所に来た日本語が全く分からない外国人という設定。日本人を困らせることを意識して、避難所にペットを連れてきても良い

か、国の家族に無事を伝えたい、避難所に書いてあることが分からない、「ご自由におとりください」と書いてある食べ物を三つ取ったら日本人に嫌な顔をされた、などの質問や相談を、英語、中国語、フランス語、ポルトガル語などで研修参加者に話してもらった。研修参加者は、外国語が分かる人はその言葉で、分からない人は携帯の翻訳アプリで対応していた。

ロールプレー終了後、留学生の代表2人に研修参加者の前で感想を話してもらった。2人が日本語で話し出すと、研修参加者の皆さんは「なーんだ、日本語を話せるのか」と苦笑いしていた。留学生が研修の趣旨をよく理解し、予想以上に役を演じきってくれたことで、実態に即した非常に良い研修になったと東京都つながり創生財団も評価してくれた。研修参加者からは、外国人が参加してくれたので避難所がよりリアルに感じられた、コミュニケーションの難しさを感じた、多くの気付きが得られた、などの感想があった。留学生たちからは、楽しかった、災害のことだけでなく日本語の勉強にもなった、などの声があった。

研修後1ヵ月もたたないうちに能登半島地震が発生した。被害が大きかった奥能登地域には約160人の外国人技能実習生がいたが、避難所にいても母国語での情報がなかったり、生活様式の違いなどで居づらくなったりして、避難所を離れる人が多かったという。東京と地方では居住する外国人数や外国人を支援する団体数などに違いがあって、外国人の避難所での生活のハードルの高さは異なるかもしれない。しかし、各地でこのような研修を重ねることによって、いざというときの活動の知識を持つことは、外国人との共生の観点から、とても重要なことだと思う。



研修風景



ミャンマーからの留学生とのやり取り

会員の種類

種類	内容	年会費
正 会 員	センターの趣旨に賛同し、活動を推進し、会費を納める個人、法人および団体。（理事会の承認を得て入会）	法人および団体 1 口 50,000円
		個人 1 口 10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める活動会員、ならびに個人、法人および団体。	法人および団体 1 口 10,000円
		個人 1 口 5,000円
活動会員	センターの趣旨に賛同し、事業に参加しようとする個人。	不要 — —

(2024年2月末現在)

正 会 員

法人・団体（16社、1団体）〈社名五十音順〉

〈10口〉 伊藤忠商事(株) 住友商事(株) 双日(株) 豊田通商(株) 丸紅(株) 三井物産(株) 三菱商事(株) (一社)日本貿易会
 〈2口〉 稲畑産業(株) 岩谷産業(株) 長瀬産業(株) 日鉄物産(株) 阪和興業(株)
 〈1口〉 兼松(株) 興和(株) JFE商事(株) 蝶理(株)

個人（11名）〈敬称略・氏名五十音順〉

〈3口〉 中村邦晴
 〈1口〉 池上久雄 市村泰男 岩城宏斗司 岡 素之 小林栄三 小林 健 佐々木幹夫
 寺島実郎 宮原賢次 吉田靖男

賛 助 会 員

法人・団体（3社、1団体）〈社名五十音順〉

〈2口〉 (公社) 東京のあすを創る協会
 〈1口〉 (有)イーコマース研究所 (株)エックス・エヌ 三谷ビジネスパートナーズ(株)

個人（185名）

活 動 会 員 3,025名

賛助会員入会のお願い

ABICの活動にご賛同いただき、資金的な援助をしていただける活動会員およびその他の個人の方、
 ならびに法人および団体の皆さまのご入会をお願い申し上げます。

会員入会のお問い合わせ・連絡先

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター（ABIC）

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-2-1 霞が関コモンゲート西館20階

TEL：03-6268-8604 FAX：03-6268-8652 E-mail：mail@abic.or.jp